様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：１５５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００７６１

研究課題名（和文）学術研究論文におけるヘッジの使用の比較分析とヘッジの習得に関する考察

研究課題名（英文）A Study of Hedges Used in Academic Research Articles

研究代表者
藤村　香予（Fujimura-Wilson, Kayo）

山口大学・経済学部・教授

研究者番号：８０７３６５５４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は英語のアカデミックライティングで重要とされる「ヘッジ（緩衝表現，配慮表現)」の使用を英語母語話者と日本語母語話者の学術論文において比較分析し，日本語母語話者の英語のヘッジの習得と使用について語用論の観点から考察した。論文でのヘッジの使用を英語母語話者と日本語母語話者の英語で書かれた理系論文と文系論文で比較分析し，日本語論文のヘッジの使用と共に考察したことで，分野間によるヘッジの使用の違い，英語と日本語の学術論文における文章表現の違いが明らかになった。更にアカデミックライティングの授業で使用されている教科書のヘッジの調査では，英語学習者に向けた適切な指導内容を考察することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本人研究者は国際的な場で研究結果を発表し英語による論文投稿が求められている現状から，英語による論文執筆において英語と日本語の文章やことばの使用の違いを認識する必要がある。そのため本研究は，英語母語話者と日本語母語話者によるヘッジの使用の違いを語用論の観点から分析する目的で行われた。日本語で書かれた論文内で使用されているヘッジについてはこれまであまり研究されていなかったが，本研究では論文内の日本語のヘッジを体系的にまとめ，英語のヘッジと比較分析することができた。これらの結果から日本人英語学習者に向けた効果的な英語のヘッジの使用に関する指導内容を考察することが可能となった。

研究成果の概要（英文）：This study illustrates the comparison of the use of English hedges in academic research articles between native English and Japanese writers to understand their use from a pragmatic perspective. The results of this study showed that the use of English hedges in academic research articles was different between native English and Japanese writers in soft disciplines (e.g. humanities, applied linguistics, economics and business) and that there were also differences in their uses between hard disciplines (e.g. medicine, sport science) and soft disciplines. Moreover, Japanese writers used fewer Japanese hedges compared to native English writers using English hedges. These differences reveal that hedges in academic research articles are differently used between native English and Japanese writers according to their academic fields. In analyzing academic writing textbooks, hedges were not always introduced, therefore, the functions of hedges need to be taught to Japanese learners of English.

研究分野：語用論，社会言語学，応用言語学

キーワード：metadiscourse markers　hedges　academic writing　英語論文

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

談話で使用されるヘッジは，話し手や書き手の主張を意図的に和らげて伝える役割がある(Hyland, 1995)。英語の学術論文においては，筆者がはっきりと主張することを避け，自身の断定的な主張を公約するのを避けるのが一般的であるとされている（Hyland, 1995)。特に，人文社会科学系の英語で書かれた文系学術論文では，理数系の英語で書かれた学術論文に比べ，個人の解釈を説明したり抽象的な表現の使用が多いため，ヘッジが多く使用されている（Hyland, 1998)。英語のヘッジは Hyland(1998)により詳しく分類され, 体系化されている。研究結果を伝える際に，筆者の解釈を提示することが必要となる人文社会科学系の文系研究論文では，特にヘッジの使用は必要不可欠なものとされている。

英語のヘッジは品詞で分類することが可能であり，ヘッジの品詞による分析がこれまでも行われてきた。英語のヘッジは indicate，suggest，appear などの動詞，would，may，might，can などの助動詞，likely，possible などの形容詞，quite，generally，perhaps などの副詞，またその他に，if 節や受け身形などの語法や文法を使用したり，将来の研究の提示をすることで間接的に伝えるなど様々な緩和表現がある。

これまで英語で書かれた学術論文においてヘッジの重要性が強調されてきた。研究方法が異なっているものもあるため，必ずしもデータを比較することができるわけではないが，スペイン語(Lee & Casal, 2014)，中国語（Hu & Cao, 2011)，ペルシャ語（Samaie et al., 2014)など英語以外の言語と英語のヘッジの使用の比較研究が近年盛んに行われている。しかし，日本語論文におけるヘッジの使用の比較分析を含めた日本人の英語学術論文の研究は行われていなかった。

２．研究の目的

本研究は，英語の学術論文において筆者がどのように読者や同じ研究分野の研究者に配慮し，自らの立場を守りながら言語ポライトネス理論に基づいてヘッジ（緩衝表現・配慮表現）を使い主張をしているのかを，英語母語話者と日本語母語話者の論文の間で比較分析することでそれぞれの使用の特徴と違いを語用論の観点から明らかにしていく。これにより，英語母語話者ではない日本人が研究発表の一部である英語学術論文を執筆する際に必要なヘッジの知識を習得するために, 英語教育における専門英語であるアカデミックライティング（English for Academic Purposes）の授業で，必要なヘッジの使用について適切な指導内容の提示を行う。

これまでの英語教育における日本人英語学習者のヘッジの使用に関する研究では，主に使用頻度による違いの分析が行われてきた。しかし，日本語母語話者の論文を分析したヘッジの使用の研究はこれまでほとんど行われていなかった。また，日本語母語話者の日本語論文と英語論文のヘッジの使用の比較も，認識する限りでは行われていなかった。そのため一般に公開された研究論文をデータとして使用し比較分析することで，日本語母語話者において日本語と英語の二言語間で語用の転換（ランゲージ・トランスファー）がどのくらい行われているのかを見ることができ，日本人英語学習者への的確な提言ができるのではないかと思われる。また，語彙レベルの分析からどういった解釈で英語のヘッジが使用されているのかを把握することができる。

３．研究の方法

本課題は以下の 3 つの研究から成っている。

(1) この研究では，英語母語話者と日本語母語話者による英語で書かれた理系論文と文系論文におけるヘッジの使用を比較分析した。分析データは，理系論文ではスポーツサイエンスと医学系論文を使用し，文系論文では経済学と経営学，応用言語学と言語学の論文を使用した。英語母語話者と日本語母語話者によって書かれた理系論文と文系論文の４つのグループでそれぞれ８つの論文を選び，合計 32 の論文の「結果」「考察」「おわりに」の箇所に使用されたヘッジの数と種類を分析した。分析の際には質的分析プログラムである MAXQDA を使用してヘッジをコード化し，それぞれのグループでどのようにヘッジが使用されているのかを調査した。

(2) この研究では，大学での英語のアカデミックライティングの授業においてどのようにヘッジの使用が取り上げられ授業で教えられているのかを明らかにするために，中級レベル以上の英語ライティングの教科書でヘッジが取り扱われている個所を分析した。また，教科書で使用されている論文例におけるヘッジの使用を分析した。ヘッジは授業において，英語をある程度習得している中級レベル以上の教科書で取り上げられることがある。本調査ではイギリスとアメリカ，日本の出版社が出版した大学の授業で使用されているアデミックライティング用の教科書 10 冊を分析した。質的分析プログラムの MAXQDA を使用してヘッジをコード化し，それぞれの教科書でどのようにヘッジが使用されているのかを分析した。

(3) この研究では，日本人のヘッジの使用の特徴を見ていくために，ヘッジの使用が多いとされている文系論文を取り上げ，英語母語話者と日本語母語話者の英語論文と，日本語母語話者の日本語論文を比較分析した。文系論文では経済学と経営学，応用言語学と言語学の論文においてそれぞれ 10 の論文を使用し，合計 30 の論文において英語と日本語のヘッジの使用を分析した。ヘッジの定義と種類は，英語論文においては Hyland(1998)により多くの研究が行われてきたが，日本語論文では研究が少ない上，ヘッジの分析ではなく日本語学の特定語彙の使用の分析にとどまっている。そのため本調査では，日本語の配慮表現と緩衝表現，和らげる機能を持つ表現の中から書きことばにおいてヘッジの機能を持ったもの，日本語文法において助動詞の意味を含む可能動詞の使用など日本語論文内でヘッジとして使用されていることばを取りまとめて分析した。分析箇所は，論文の「結果」「考察」「おわりに」の箇所を使用しヘッジの数と種類を分析した。質的分析プログラムの MAXQDA を使用してヘッジをコード化し分析した。

４．研究成果

3 つの研究の他に，英語のヘッジの研究を教材用に応用させ練習問題の提案も行った。

(1) 本研究では，英語母語話者と日本語母語話者の英語で書かれた理系と文系の学術論文をデータとして，学術分野におけるヘッジの使用を英語母語話者と日本語母語話者の間で比較分析した。その結果，文系論文では英語母語話者によるヘッジの使用が日本語母語話者より多いことがわかった。数字を使った統計的な結果を提示する理系論文では，結果について議論し読者に訴える必要がある文系論文と比べて，ヘッジの使用が少ないことが知られている(Hyland, 1996)。理系論文では英語母語話者と日本語母語話者ともに 1,000 語あたり 19.1 個のヘッジが使われており，研究者の母語によるグループ間で頻度の違いは見られなかった。文系論文の結果では，英語母語話者は 1,000 語につき 24.1 個のヘッジを使用していたのに対して，日本語母語話者においては 1,000

語につき 21.1 個のヘッジを使用しており，英語母語話者の使用が少し多いことが確認できた。全体的な結果では，理系論文を書いた日本語母語話者もある程度の量のヘッジを使用しており，理系と文系の分野間におけるライティングストラテジーの違いが影響しているのではないかと考えられた。理系論文では，全体的に論文の長さが短く，似通った形の文章を使用して結果が述べられており，これらのライティングストラテジーを日本人研究者も習得していると考えられる。

ヘッジの品詞別による分析結果では，助動詞の使用が一番多かった。英語母語話者の理系と文系論文，また日本語母語話者の理系論文では同じような頻度でヘッジに助動詞が使用されていたが，日本語母語話者の文系論文ではその頻度は低かった。理系論文では，副詞や名詞，if 構文や we の使用によるヘッジが文系論文と比較すると少なかった。一方，文系論文では we の使用と if 構文など読み手を含めた文章や仮定した状況を説明する文章が使われており，分野間での議論の仕方とそこで使用される文章が異なることがわかる。特に複数のヘッジを一文に使用する手法は英語母語話者の文系論文に多く見られることから学術論文におけるヘッジの使用は文系論文におけるストラテジーであることがわかる。これらの結果をふまえて，日本人英語学習者に英語論文を書く際のヘッジの使用を教える際に，分野別に具体的にどのようなヘッジが使用されているのかを含めて説明する必要があることが明らかとなった。

(2) 本研究では英語の授業におけるヘッジの教授について考察するために，大学のアカデミックライティングの授業で使用されている国内外の中級レベル以上の教科書 10 冊をデータとして，ヘッジの導入と練習問題について分析した。今回使用したイギリスとアメリカと日本の出版社のアカデミックライティングの教科書でヘッジを取り上げていた教科書は 4 冊しかなかった。またヘッジを紹介していた教科書においても，ヘッジの和らげる機能の他に，筆者を守る役割について説明をしていたものは 1 冊しか見られなかった。ヘッジを紹介している教科書ではヘッジの品詞別による使用を説明していたが，ヘッジを使った構文や文章例を詳しく説明して提示しているものは少なく限られていた。これらの結果から，教員のヘッジの知識と十分な練習問題の作成が必要であることがわかる。

教科書に載っている論文例においてヘッジがどのくらい使用されているのかを分析すると，1,000 語あたり 31.4 個のヘッジが使用されていた。この結果から，英語論文ではヘッジをある程度使用する必要性が確認できた。使用における品詞別分析では，助動詞と形容詞の使用例が多く見られ，形容詞の使用では数字を示唆する数詞(例 many, some)がよく使用されていた。アカデミックライティングの授業で英語のヘッジの役割の説明と練習問題が必要であることが確認できた。

(3) 本研究では，英語母語話者と比べて日本語母語話者の英語のヘッジの使用が少ない理由を明らかにするために，英語で書かれた論文と日本語で書かれた論文で使われているヘッジを比較分析した。書きことばに使用されている日本語のヘッジをまとめると言語間の文法の違いとして，英語において助動詞と動詞の組み合わせが使用される箇所で，日本語では可能動詞（例 考えられる，思われる）が使用されるなど異なるものもある。今回日本語のヘッジを書きことばで取りまとめて文系日本語論文においてどのくらい使用されているのかを分析すると，英語母語話者の文系論文でのヘッジの使用と比べて約 3 分の 1 の使用であることがわかった。英語母語話者は 1,000 語につき 25.8 個のヘッジを使用しているのに対し，日本語母語話者による英語の論文では 1,000

語につき 17.6 個，日本語の論文ではさらに少なく 1,000 語あたり 8.7 個であった。これらの結果から，日本人研究者の論文におけるヘッジの使用は母語である日本語論文においてかなり少なく，ヘッジの使用に対する認識が低いのではないかと考えられる。日本語論文を書く際のストラテジーも英語論文と異なることが考えられる。

日本語論文におけるヘッジの使用では英語のヘッジで最も使用されている助動詞の使用が半分以下であり，形容詞，副詞，仮定を表す表現の使用もほとんど見られなかった。また読み手を含めた表現として使用される人称代名詞「私たち」の使用は確認できなかった。日本語論文で使用されたヘッジは動詞と名詞に偏っていた。動詞の使用では「考えられる」「見られる」などの可能動詞が多く，他に「傾向がある」「示唆する」などもよく使われる動詞として確認できた。名詞においては「可能性」や「傾向」を使用した文章が多く見られた。これらの結果から，日本語論文では決まった言い回しを使用することが多いことがわかり，ひいてはヘッジの種類の少なさと頻度の低さに影響していることが考えられる。英語で書かれた論文では読者との繋がりを示し，考えを共有し構築するシグナルとして人称代名詞の we や I を使うことがある(Hyland, 2002)が，日本語論文では個人的な主張を示す表現を避けるために人称代名詞の「私たち」や「私」を主語とした文章は使われない。言語を使用する文化間での思考の違いも英語と日本語のことばの使用と文章表現の違いに結びつき，結果的にヘッジの使用頻度に影響しているのではないかと考えられる。

(4) 本課題の英語のヘッジの研究を教材用に応用させた章を，英語教育に語用論を活かす目的の書籍 *Pragmatics Undercover: The Search for Natural Talk in EFL Textbooks* に投稿した。本エクセサイズでは，英語のヘッジの使い方を習得するために，英語のヘッジが使われていない文章と使われている文章を比較し，どのように文章の意味が和らぎ間接的に主張することができるのかを提示している。英語のヘッジにおけるポライトネスの機能も説明し，様々な状況を想定して会話の中で文章を和らげて主張する練習ができるようになっている。

引用文献

Hu, G., & Cao, F. (2011). Hedging and boosting in abstract of applied linguistic articles: A comparative study of English-and Chinese-medium journals. *Journal of Pragmatics*, *43*(11), 2795-2809.

Hyland, K. (1995). The author is the text: Hedging scientific writing. *Hong Kong Papers in Linguistics and Language Teaching*, *18*, 33-42.

Hyland, K. (1996). Writing without conviction? Hedging in science research articles. *Applied Linguistics*, *17*(4), 433-454.

Hyland, K. (1998). *Hedging in scientific research articles*. Amsterdam: John Benjamins.

Hyland, K. (2002). Options of identity in academic writing. *ELT Journal*, *56*(4), 351-358.

Lee, J. J., & Casal, J. E. (2014). Metadiscourse in results and discussion chapters: A cross-linguistic analysis of English and Spanish thesis. *System*, *46*, 39-54.

Samaie, M., Khosravian, F., & Boghayeri, M. (2014). The frequency and types of hedges in research article introductions by Persian and English native authors. *Procedia - Social and Behavioral Sciences*, *98*, 1678-1685.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Kayo Fujimura-Wilson	４．巻 58
２．論文標題 Use of Hedges in English and Japanese: A Comparative Study of Empirical Research Articles by Native English and Japanese Writers	５．発行年 2023年
３．雑誌名 英語と英米文学	６．最初と最後の頁 25-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.13039/501100001691	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Kayo Fujimura-Wilson	４．巻 8
２．論文標題 A Study on the Instructions on the Use of Hedging in English Academic Writing Textbooks	５．発行年 2022年
３．雑誌名 JACET International Convention Selected Papers	６．最初と最後の頁 85-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.50943/jacetselectedpapers.8.0_85	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Kayo Fujimura-Wilson	４．巻 17
２．論文標題 Hedging Use by Native English and Japanese Writers in Hard and Soft Disciplines of Academic Articles	５．発行年 2020年
３．雑誌名 大学英語教育学会 中国・四国支部研究紀要	６．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　1件／うち国際学会　7件）

１．発表者名 Kayo Fujimura-Wilson
２．発表標題 The Acquisition of English Hedges by Learners of English
３．学会等名 The 49th Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Material Exhibition（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Kayo Fujimura-Wilson
２．発表標題 A Study on the Use of Personal Pronouns in Academic Writing
３．学会等名 The 61th JACET International Convention（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Kayo Fujimura-Wilson
２．発表標題 An Analysis of Hedging Taught in Academic Writing Textbooks
３．学会等名 The 47th Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Material Exhibition（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Kayo Fujimura-Wilson
２．発表標題 A Textbook Analysis of Instruction on Hedging Use in Academic Writing
３．学会等名 The 60th JACET Commemorative International Convention（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Kayo Fujimura-Wilson
２．発表標題 The Use of Hedges in Academic Research Articles Written in English and Japanese
３．学会等名 The 17th International Pragmatics Conference（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Kayo Fujimura-Wilson
２．発表標題 An Analysis of Japanese Writers Hedging Use in English and Japanese Academic Articles
３．学会等名 第3回 JAAL in JACET（日本応用言語学会）学術交流集会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Kayo Fujimura-Wilson
２．発表標題 Use of Hedges in Interaction
３．学会等名 Pragmatics Undercover: Online & In Class（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Kayo Fujimura-Wilson
２．発表標題 An Analysis of English Hedges Written by Native English and Japanese Writers in Academic Research Articles
３．学会等名 The 58th JACET International Convention（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kayo Fujimura-Wilson
２．発表標題 Hedges Used in Academic Articles Between Native English and Japanese Writers
３．学会等名 The 16th International Pragmatics Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 Talandis Jr, J., Ronald, J., Fujimoto, D., & Ishihara, N. (Eds.)	４．発行年 2020年
２．出版社 The Japan Association for Language Teaching	５．総ページ数 210
３．書名 Pragmatics Undercover: The Search for Natural Talk in EFL Textbooks	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関